

第21回UJNR水産増養殖専門部会 日米合同会議議事要録

第21回UJNR水産増養殖専門部会日米合同会議は、1992年11月26日（木）、27日（金）京都エミナースにおいて開催された。シンポジウムの課題は「水産増養殖における環境管理」である。

I. 事務会議

日本側部会長高木健治、米国側部会長 J. P. McVey、UJNR次長渡邊洋一郎から開会及び歓迎の挨拶が述べられたのち両国の部会長より出席委員とオブザーバーが紹介された。事務会議は日米両部会長の合同座長で進められ、書記として中島員洋日本側事務局委員と G. Hoskin米国側委員を選出した。シンポジウムの司会は、日本側 前田昌調、岸道郎、平田八郎、米国側 F. Malone、D.E. Brune、J.P.McVey が、またサテライトシンポジウムの司会は乃万俊文とW.Heardが担当することとした。

UJNR水産増養殖専門部会における両部会の各担当責任者を以下の通り確認し、議事日程、シンポジウム議題、および現地検討会スケジュールを異議なく了承した（別紙I、II、IV、V）。

共同研究	中島員洋	J. P. McVey
研究者の交流	田中秀樹	J. Michell
文献交換	前田昌調	D. Hanffman
出版	小西光一	M. Collie

1. 研究者交流

UJNRに係わる研究者交流は、1991～1992年も継続して行われ、日本側から10名の研究者が米国を訪問したことが紹介された。アメリカ側からオレゴン州立大学のJ. LeongとC. Langdon、ノースキャロライナ州立大学のC. Sullivanの3名が日本を訪問したこと、これらはある種の共同研究の1つとして位置づけられる旨報告された（別紙VI）。また学生が全米科学財団から予算を得ており、日本側の受入れ先について協力への期待が米国側より表明された。

2. 文献の交換

日本側から124編の論文とそのリスト、並びに1991年度版漁業白書（英語版）を近く米国側に送付予定である旨報告された。米国側から米国連邦機関の89編の論文とそのリストが提出された（別紙VII、VIII）。論文89編は前田事務局委員に手渡された。日米両国ではUJNR関係文献の特別コーナーを設けると共に、それらの文献は主要研究機関に紹介、送付され有用に活用されている旨報告された。

3. 共同研究

日本側から現在共同研究の予定がない旨報告された。米国側より J. Leong、C. Langdonらによって共同研究が開始されているとの説明があった。また米国側より今回のシンポジウムの際に日本側の研究者との共同研究の可能性を探っていきたいとの期待が述

べられた。

4. 出版物の刊行

日本側よりこれまでの経過について説明がなされた。1989年第18回シンポジウムは、NOAA Technical Report NMFS 106として1992年2月に刊行され、1990年第19回シンポジウムは校正が完了しており、まもなくNOAA Technical Reportとして出版される予定である。1991年第20回シンポジウムは、それぞれの著者の最終原稿がフロッピーディスクとともに、送付されつつあるとの報告があった。米国側より1991年のシンポジウム報告書については16～17編の原稿の内8編の原稿が校了、全ての原稿の校了は4月になる旨報告された。日本側より今回のシンポジウムの原稿提出期限について、1993年の2月末とする旨の提案がされ異議なく了承された。また投稿手続は以前に取り決めた内容に従って行うこと、最終原稿は電算機ディスクに入力したものと共に提出すること、および米国側出版担当者からフォーマットしたディスクを著者に配布することが再確認された。その際、日本とアメリカで行うディスクのフォーマット方法が異なるため、2HCのフォーマットかマッキントッシュの場合は、2DDを使用する旨日本側から提案された。米国側より、望ましいが簡単には解決しないのではないかとの発言があった。第21回のプロシーディングについては2月までに米国側の原稿を処理し、その後日本側の原稿を処理し、8月までに完成したい旨の期待が米国側より述べられた。さらに米国側より新しい技術的とりくみとして、会議開催時に原稿ディスクを持参し会議中にそれらのファイルを1つのディスクにまとめるというソフトを所有しており、これらは既に米国内のワークショップで試行していることから、将来はこのシステムを使用したいとの意向が表明された。またNOAA Technical Report 106について日本側からの約100部の提供要請をうけ、米国側より既に発送したとの報告がなされた。

5. その他

米国側より今後の活動方針については、シンポジウム期間を通して非公式な型で話をしたいとの意向が述べられた。さらに長期にわたって、両部会の緊密な関係をうちたてるうえで、若い研究者の交流が重要であることが述べられた。

6. 次期合同会議について

米国側より次期第22回合同会議を、8月にアラスカで開催予定であると報告された。主題は、「環境中における天然種と養殖種の相互作用」であり、会議日程は以下の通りである。

- 8月19日 アンカレッジ着
- 20日 フォーマー着
- 21日 UJNR事務会議及びシンポジウム（フォーマー）
- 22日 シンポジウム（フォーマー）
- 23日 フィールドトリップ フォーマー近郊
- 24日 セワードへ移動

- 25日 サテライトシンポジウム(セワード)
- 26日 セワードからアンカレッジへ移動
- 27日 アンカレッジ近郊のフィールドトリップ
- 28日 アンカレッジ発

7. 現地検討会

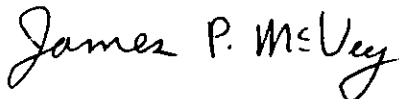
現地検討会のスケジュールについて日本側より説明があった(別紙IX)。

II. シンポジウム

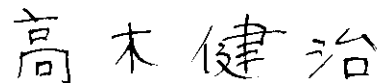
シンポジウムは京都エミナースで開催され、22の研究発表があり活気あふれる討論がなされた(別紙III)。総合討論では、J. P. McVeyによるシンポジウムの総評後、討論がなされた。養殖に対するアプローチ方法、自然水域の水利用に関する基本的な考え方、主要な養殖対象魚種などでの日米両国の違いについて議論がなされた。さらに、バイオコントロールと魚病対策、外来魚種の導入と抗生物質等薬剤使用の問題、ならびに養殖施設へのコンピューターシステムの活用などについて討論が行われた。最後に J. P. McVey 及び高木健治の両国部会長により閉会の辞が述べられ閉会となった。

京都エミナース

1992年11月27日



ジェームス マクベイ
米国側部会長



高木健治
日本側部会長